On the interdisciplinary education of the Faculty of Liberal Arts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間, 政広 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24965

佐久間　政広（教養学部地域構想学科、勤続34年）

未完の教養学部

学際性・総合性を掲げる教養学部

地理学を専門とする高野岳彦先生によれば「地理学は“目に見えるもの”を“目に見えないもの”によって、社会学は“目に見えるもの”で“目に見えないもの”を説明する」。この言葉は、直接には目に見えない社会関係に焦点をあてる社会学の特徴を的確に言い表しています。社会学を専門とする私は、泉キャンパスという目に見えるものを舞台として繰り広げられてきた、教養学部の教育という目に見えない営みについて考えてみます。

泉キャパンスの歴史は、1988（昭和63）年、文・経済・法学部の教養課程の移設から始まります。私は、この年、東北学院大学に着任しました。翌1984（平成元）年、人間科学、言語科学、情報科学の３専攻からなる教養学部がスタートします。

教養学部は、「国際化、高度技術化、情報化の進む現代社会にあって、人間生活の抱える種々の問題に対処する新しいタイプの教養人を育成する」ことを教育理念とし、開設当初より、「学際性・総合性」を指針として掲げてきました。専門のタコ壺化を回避して、学問の学際性・総合性を重視する教育をおこなう、実に魅力的です。

しかし、その実現は容易ではありません。30年以上にわたる教養学部の教育は、この学際性・総合性の実現をめざす挑戦の歴史でもありました。以下、その試みのいくつかを述べてみます。

学際性・総合性をめざしての工夫

第一に、教養学部各学科（各専攻）のカリキュラムにおいて工夫がなされました。教養学部教育課程表に、他の学部にはない教養学部独自の教養教育「第５類」科目群を設定したり、後には学部の専門科目として「学部共通科目」を設けたりして、教養学部の学生に幅広い視野と多様な視点を身につけさせようとしました。

第二に、各学科の３年次の演習（ゼミ）と４年次の総合研究（卒業研究）を「学部共通科目」とすることにより、学科（専攻）の間の垣根を低くしようとしました。例えば、佐久間担当の「地域構想学演習」「総合研究（卒業研究）」に、地域構想学科の学生だけでなく、１～２名の言語文化学科や人間科学科の学生が履修するといった具合に、一定の条件のもと学科の垣根を跳び越える仕組みを作りました。

第三に、一つのテーマをめぐって、異なる専門の複数の教員が授業を担当するオムニバス形式の科目の開設です。教養学部がスタートして間もない頃は「総合科目」、後には「現代社会

の諸問題」という名称の科目です。私がコーディネーター役を務めたケースを紹介すると、「総合科目」の頃、「現代における生と死」というテーマを設定し、英文学、哲学、生物学、社会学を専門とする教員が授業をおこないました。「生き物を扱う生物学は、“生きている／生きていない”の間に境界線を引くことができない。それを決めるのは外部の観察”という内容の授業は、いまでも記憶に残っています。「現代社会の諸問題」の時代では、「現代社会における“私さがし”」とのテーマのもと、心理学、哲学、社会学、文学の専門とする教員が授業を担当しました。太宰治、村上春樹といった人気作家の文学作品における“私さがし”に関する講義は、学生たちの関心を大いに引きました。

第四に、４年次必修科目「総合研究（卒業課題）」の指導体制です。

総合研究の指導体制をめぐる困難

「総合研究（卒業課題）」は、いわゆる卒業論文・卒業研究の科目で、教養学部教育のもっとも重要な柱の一つです。教養学部では、開設当初よりこの科目を必修とし、科目名称を「総合研究」にしてきました。この「総合」には二つの意味が込められています。一つには、大学４年間の学びの総合。もう一つは、さまざまな学問分野から学んだ多様な知識や視点を活用して、問題に対して「総合的に」アプローチするという意味での総合です。

教養学部がスタートしてまもなく、総合研究の指導のあり方について検討が開始され、１年あまりのち、教授会の席上で集団指導という方式が示されました。各専攻それぞれに複数のテーマを設定し（異なる専攻の間を跨がるテーマを推奨）、そのテーマのもとで指導する教員と指導を受ける学生が集まる、という指導体制です。異なる専門の教員たちの共同指導により、学際性・総合性の実現をめざしたのです。当時、食の安全性をめぐる生産者と消費者の連携について調査をおこなっていた私は、環境問題をテーマとするチームに加わりました。集団指導の具体的なやり方について、同じチームの気候学、化学を専門とする教員たちと幾度となく相談を重ねたのですが、その結果は、それぞれ研究手法等で大きく異なるので、まともな卒業研究をさせるには日常的な共同指導は困難、という結論でした。せめて“構想発表会、中間発表会、最終発表会だけは共同で実施する”ことにしました。他のチームも同様の経緯をたどったようです。

未完の教養学部

「国際化、高度技術化、情報化」が激しく進展する現代社会の人材には専門性が求められるからこそ、学際性・総合性の教育が必要と教養学部は考えました。30余年にわたる教養学部の教育の営みにおいて、それが実現できたか否か定かではありませんが、決して無意味ではなかったと思います。こうした教養学部の企ては、もうすぐ「未完」という文字とともにピリオドが打たれます。